

# 手記

## シベリア抑留体験記

北海道 宮崎 維新

### 敗戦と抑留

私達は、世界大戦の最中に青春を迎え、青空のような希望の色も緑の安らぎもすべてのものが、お国の為と灰色に塗り変えられ、学業も半ばで別れに涙をためながら、「聖戦」と言う名のもとに召集され、祖国愛に燃え、勝てぬ戦いとも知らず青春を駆けて行った。青春は再び戻らない。年老いても老いに甘えず、残り少ない春秋を楽しむことである。

終戦間際に、ソ連は日ソ不可侵条約を一方的に破棄し、怒濤のごとく満州、樺太、千島に攻め寄せた。虜囚になった北国の戦士は極東シベリアに移され、厳寒に身を凍らせ、飢えに苦しみ、数万の将兵が死んだ。多くの若者は帰国の夢を見て苦役に耐えた。

オリオン、高くかかりて、澄み渡る、厳冬の星座、仰ぎ見る、配所の月、又悲しき。

音も無く、異国の町、夜気、深々として身に浸む、悄然として、この地をのぞむ、遠く野犬吠え。

ニコライの夜明、ああ、この凍れる雪を踏み、寒風に立つ、憔悴せる、虜囚の姿。

暁に祈る、只、帰国の一日も早からむを、慕わしき、父母、懐かしき兄弟、溢れ出る涙、忽然として凍りぬ。

月日は過ぎ、年はめぐれども、祖国に帰れる望みもなく、友が倒れてもなすすべもなく、死期を悟った病床の古年兵が、「これを家族に」と差し出した観音様のお守り、その胸の薄さと手の細さに涙がこぼれた。友が死んでもその骨を捨てることのできない。荷物のように無造作に遺体が運び去られた。ソ連兵が遺品を漁り、時計、万年筆、鏡と女の写真をニヤニヤしながらポケットに入れた。

荒涼の原野シベリア、朝日に夕日に望郷の日々、苦難に耐えた幾星霜。

復員船の汽笛が鳴った。山が見えた。日本の山だ。港が見える。日本の港だ。街が見えた。日本の旗だ。沸き上がった歓声。溢れる涙。美しい故郷の山河。懐かしい同胞の顔、眩しかった。日の

丸の旗のはためき。ああ祖国よ。帰らぬ人の話に、迎えの人々とともに泣いた。抑留の日々と戦友の死と。

一枚の赤紙で集められた兵隊は、皇国のためと謳われながら、意地悪な古参兵の扱いに耐え、惨めな思いに耐えたのも、苦難を共にした友がいたからである。受難の友は慰め合い、互いに涙を拭き合って耐えたのである。起居を共にし、その思想も好みも超えて、肝胆相照らす仲になった友なのである。

その友は三人、今も健在でいる。ときどきの出会いが楽しいひとときでもある。

人間は必ず一度は死ぬものだ。そうならば、陛下のため、国家のために名誉ある戦死をすること、が男子の本懐ではないかと教えこまれた。

忘れがたい思い出の中から。

平成三（一九九一）年九月一日

原隊 第八八師団第三〇六連隊、通信中队、有線班（樺太大泊）

階級 陸軍二等兵 昭和二十(一九四

五)年六月二十八日入隊、八月十五日終戦

虜囚とは、四方二重の有刺鉄線の中に囲まれ、

常に監視の中にあつて、他国に生命を委ね、粗

食、寒さ、労働、栄養失調、燃えないペーチカ、

仕切りのない共同便所。その中でようやく生きて

いる兵隊である。そして、生きて祖国に帰って

も、何一つ報いられない人のことである。

1 大正十四(一九二五)年五月六日、亀田郡銭

亀沢村字根崎で出生。昭和七年四月、宇賀小学

校入学。昭和十一年一月、樺太大泊郡遠淵小学

校に転校。昭和十五年三月卒業。

2 同年四月、単身上京し、日中働きながら、夜

間予備校に通い、翌年四月、夜間商業学校に編

入。

3 昭和十六年十二月、太平洋戦争始まる。学校

を卒業し昭和二十年三月、帰国。同年六月、現

役兵として入隊(大泊)。昭和二十年八月、終

戦。同年十月、シベリア抑留。

4 昭和二十二年八月、復員。翌二十三年四月、

砂原村役場に就職。昭和六十一年十二月、退

職。

シベリア抑留の夏冬の思い出

凍傷で二カ月、六カ月過ぎて栄養失調で二カ月

入院した。入院の際には入浴させられ、体の毛は

全部カミソリで剃られてしまう。大事な恥ずかし

い部分ももちろんである。シラミの発生防止のた

めだそうである。十六歳ぐらいの見習看護婦に、

血管注射を失敗しながら四、五回もやられたとき

には閉口した。私達を試験台にして実地勉強をし

ているらしい。失敗するたびに私達の顔を見て、

申し訳なきような顔をしていた。愛らしさがいっ

ぱいであった。

トイレにも困った。男女の区別がなく、しかも

一カ所しかない。知らないでトイレの戸を開けて

女医さんに叱られたことがあった。(昭和二十一

年二月)

「フシヨー、フレープ、エース？」トラックに乗った私達を見上げて、「みんなパンを持ったか」と収容所長が聞いた。「エース、エース」私達は口を揃えて叫んだ。「ラボータハラシヨー、スコーラダモイ」と言いながら、所長は黄色い歯をむき出して笑った。エンジンがかかるとトラックは真夏の朝の爽やかな空気を大きく揺すぶって行った。まだ朝の眠りを楽しむ白壁の家、工場へ通うハンマーをぶら下げた黒い顔の労働者、小豆色のペーチカの煙筒、カーテンを開ける寝巻姿の太ったマダム、ちよろちよろと豚の子。早朝の風物を点々とかつとぼし、トラックは走り続ける。トラックはレンガ工場に着いた。ここが私達の、ここ一週間の仕事場であった。

「ズラスティ」感情のない、お世辞のような私達の太い声。「ズラスティ」「ズラスティ」と女達のはつらつとして明るい澄んだ声。作業はすぐ始められた。遠くウクライナから送られて来た女囚達であった。彼女達は近くのコルホーズ（集団農

場）で働いていた。彼女達は私達と同じように、二重の鉄条網で囲まれた収容所に押し込められて、毎日通って来ていた。ドイツとの戦争で敵に通じた国事犯の女達であるという。三カ月ぶりに来た農場は一面緑であった。昼の休憩。雑糞に入られて来た黒パン一切れが絶対的な私達の昼食であった。だが、この貴重な昼食の一切れの黒パンを朝食とともに一遍に食ってしまう者もいた。彼らは飯盒半分のスープだけである。

馬車追い（馬車を使い物を運搬する人）がレンガを運搬に来た。運ぶ枚数によって駄賃が支給されるこのことである。こちらから、「フシヨー（もしもし）」と言葉をかけると、とたんに「ヨックポイマーチ（馬鹿野郎）」と返って来た。聞いてみると、言葉をかけられると、今数えている数を忘れてしまうからだと言う。私が積み終えてから数えられるからと教えても本当にしない。積み終わってから数を数えてやり、レンガを下ろしたときに改めて数えてみなさい、と言ってやった。

帰って来て「ハラシヨー、ハラシヨー」と言つて握手を求めて来た。

次の日も積み終わつてから、「ヤポンスキーンルダート、イジエスダー（日本の兵隊、こっちに來い）」と言ふ。「イシヨールラス（もう一度教えてくれ）」と頼んでくる。不思議そうに数え方を見ていた。数え方が本当にわかつたかどうか。彼らは45×12×8という方法を知らないようだ。

馬の個人所有は許されていないので、国から貸し付けられているとのである。

帰れる日は果たして来るだろうか、再び故国の土を踏むことのできる日が、我が家の畳の上で大の字に仰向けになつて、誰からも文句を言われることなく好きなことができる日が果たして来るだろうか。閉じたままの瞼の間からにわかには涙がにじみ出て、照りつけられた頬に伝つて落ちていった。（昭和二十一年八月）

仕事の休みの日には、寝台の隅から哀調を帯びた歌が聞こえて来る。すると、みんなが一緒に

なつて歌い始める。

宵闇迫れば悩みは果てなし、

乱るる心に映るは誰が影

君恋し、くちびるあせねど、

涙はあふれて今宵も更けゆく

「国境の町」「影を慕いて」「裏町人生」「誰か故郷を思わざる」などの歌が心に残っている。

「異国の丘」は私達が帰国した翌年（昭和二十三年）にヒットされたように思う。

#### 労苦の実態

昭和二十年十月半ば、樺太大泊港より貨物船に乗せられ十月十八日頃、シベリア北東部のニコライエフスクに抑留された。ここはアムール河口にあり、呼称は不明である。この収容所は、北千島、北満、樺太の各部隊で、およそ三千人くらいと言われていた。特に北満の部隊の中には、開拓義勇隊で十六歳くらいの少年が混じっていた。逃げ遅れたため、軍服を着せられ兵隊の員数

合わせに連れて来られたらしい。

我々がここに到着した日を最後にアムール河は結氷し、交通機関は春の雪解けまででない。最初の作業は收容所のペーチカに使用する薪の伐採で、見たこともない大きな鋸を使って一定の数量をノルマにされ、夕食の量に影響した。また別の作業は、アムール河で結氷した大きな丸太を氷を割って引き揚げ製材工場に運ぶ。氷上の寒さは筆舌に尽くし得ないものであった。初めての冬は過酷の一語に尽きた。凍傷患者が続出したため、マイナス三〇度以下のときは外作業中止となった。しかし、気温が幾らか上昇すると製材工場へ丸太の搬入。船舶の錆落とし、これはカンカン虫と呼ばれていた。

終戦後、冬用に着替えた肌着、股引、ゲートル、軍服、軍靴など、すべて中古品であった。ロシア人はシラミを嫌うので、入浴（十五日に一回ぐらい）時に洗面桶二杯だけのお湯であか洗い落として終わる。この間およそ二十分。ここを出

ると洗濯滅菌した古い下着に取り替える。脱いだ下着は洗濯後乾燥室の高温で蒸され、シラミを殺してしまう。不思議にその後シラミは帰国まで発生しなかった。下着はすべて日本軍隊のものであった。

河の水が解け船が入港すると荷役作業が始まる。昼夜の二交代作業となる。雑穀、小麦粉、砂糖、乾燥野菜、タバコ類で、最も多いのはパンの原料の麦粉である。腹の虫が動き出すと袋に穴をあけて飯盒に入れ、河の水でかたく練ってそのまま食べる。二、三日続けると下痢を起こしてしまう。樺太から来た石炭船に船倉から大きなモッコに入れて岩壁に引き揚げる。機械を操作するのはロシア人である。終わるとどの顔も黒く煤けている。

市街の道路は雪解けになるとぬかるみとなるので土を掘り起こし、そこに砂利を敷き、山から切り出した石を並べていく。大工と左官の経験者は住宅建築に、他に技能のない者は穴掘り作業をや

らされる。ノルマを与えられるが、一〇〇パーセント達成することはできない。

### 生活管理

「働く者は食べる」の言葉を信じて我々は次第に身を削っていった。しかし夕食として与えられるものは、大豆、鶏豆<sup>うずらまめ</sup>、コーリヤン、馬用の麩。日本製飯盒一つを四人で分け合い、間もなく六人分となった。分配の対象者は固唾をのんで見つめている。これに練と野菜少々の塩スープ飯盒半分だけである。

大豆、コーリヤン、麩など主食となるものは三日に一度ずつ変わっていく。朝食と昼食は三〇〇グラムの黒パンと練のスープ飯盒半分だけで、このスープに野草のネギ、ヨモギなどを入れて食べていた。朝食と昼食は夕食後一度に支給されるが、就寝前にすべて食べてしまう。翌日の朝昼はスープのみである。飢餓の前に理性が失われ、疲労し尽くした肉体にさらに拍車をかけて腹の虫が

鳴き続け、眠れぬままに夜が明ける。

腹の虫は人間の道徳を奪い、隣人のパンまで盗み、作業に出ると市井のロシア人と時計、万年筆、鏡をパンと交換する。馬鈴薯<sup>パレイショ</sup>の凍ったものを拾ってくる。人間性は食物の妄想の鬼となり、故郷を偲びながら空想の世界以外に空腹を満たす場がない。

### 民主運動について

共産主義、民主主義の波も特定の人達を除き、食糧事情が落ちつくまで侵攻してくることはなかった。ここは民主運動の無風地帯で、壁新聞、「日本新聞」の回し読みの程度であった。

### 死亡者

マイナス三〇度以下になると寒さで作業はできない。ましてアムール河ではマイナス四〇度以下になる。ただ立ったまま足踏みを続けるほかない。この作業で凍傷者が続出した。私と同年兵で

あった玉川光弘君は全身凍傷で、昭和二十年十二月二十五日死亡した。他にけが、急性肺炎、栄養失調、壊血病などで死亡者があり、帰国までおよそ二年間で百五十人くらいと聞いていた。ロシア兵が玉川君の死体を無造作に荷物のように運び去り、雪の原野に穴掘りをさせられた同僚の兵があった。墓標を建てたという話は聞かなかった。

## 住居

収容所は、一般地方人で懲役十年以上の者がシベリア送りで入る刑務所として使用されてきたということであった。我々が入るため補修された跡があり、丸太式の造りで、内外とも寒気を防ぐため土壁で厚く塗られていて、室内に入ると凌ぎやすかった。

冬期間、一棟に五百人ぐらい入っていたようだ。集団生活で、人の体温と建物内部を暖める幾つかのペーチカに薪が使用されていた。厠は建物から三十メートルくらい離れた場所に深さ三メー

トルくらい穴を掘り、その上に板を渡しただけで隣人との仕切りは全くない。建物の長さは三十メートルくらいであり、三十人が一回に並んで済ますことができる。

## 休養と医療施設

メーデー、建国記念日、戦勝記念日等を休日とし、仕事もない。収容所内に日本軍医とロシア人医師が勤務する医務室があり、入院の患者は街の病院に運ばれる。

私も凍傷にかかった一人であった。右足第一指が三センチほど切断された。この経過を見てから左の方も手術されると思っていたが、切られずに済んだ。結果的に右の足指も切断する必要がなかったものである。医療設備、器具、医師の技術は日本と比較にならないほど幼稚で、聴診器も子供のラップのようなもので患者の胸に当てていた。私は凍傷で二カ月、六カ月を経て栄養失調で二カ月ほど市内の病院に入院した。

## 私物品

武装解除後、使役のため兵舎を離れたすきにロシア兵に置き引きされた。また入院を繰り返しているうちに私物はほとんどなくなり、帰国時には軍隊時代の水筒だけだった。

## 追憶

昭和六十四年一月七日、昭和天皇崩御。長かった昭和の時代が終わった。各報道機関はその崩御の様を報じ、その波乱に満ちた御生涯と御遺徳を偲んだ。

翌日、年号が平成と改まり、新しい時代が始まった。皇居二重橋前広場を埋め尽くす人々をテレビで見ても、思いを新たにされた。皇居前広場に設けられた特設弔問記帳に、列をつくって記帳の順番を持つ多くの人々、全国各地から天皇の死を悼み悲しむため上京された人々も多かった。戦時中のように上からの命令によった行為ではなく、自らの意志で、陛下の御生前の慈愛に満ちたお顔を

思い浮かべて、立ち並ぶどの顔も心からの悲しみに満ちていた。その悲しみの行列を眺め、国民の素直な優しさに触れたような感動を覚えたものがある。明治、大正、昭和、一桁生まれの方々が多いうちに思われた。

戦争という地獄を体験、敗戦の惨めさを嘗め、九死に一生を得て、抑留地、シベリアから復員した当時を思い出す。長い捕虜生活に苦しみ、栄養失調になり痩せ細って、ようやく祖国にたどり着いた復員兵は、戦渦の祖国を眺め呆然となった。

遠い昔、昭和十八年、連合艦隊司令長官山本五十六元帥の国葬に遭遇した当時を思い起こし、複雑な気持ちであった。山本元帥は非戦論者であった。この戦いは二年もてばと心配された人であった。元帥の死は、昭和天皇も大変心を痛められたそうであった。そして、それから後の戦況を特に心配されていた。不可侵条約締結国であり、まさか攻めて来るとは想像していなかったソ連軍が、にわかに我が国に宣戦を布告、満州の関東軍と樺

太の国境を突破、樺太の一部は戦場と化した。昭和二十年八月十五日、終戦の玉音にもかかわらず、国境と真岡付近では戦火が続き、多くの人々が犠牲となった。

緊急避難のため大泊港に集結、乗船の列をつくり、引揚船に乗り遅れまいと数千人の人々が黙々と棧橋を渡っていった群集の列、その人々は皆、故郷を追われてゆくのであった。樺太の人々は、東京、広島の人のような悲惨な体験がない。それまで豊かで平和な暮らしを続けてきた者であった。何故故郷を去らねばならなかったかは判然としないまま、複雑な思いだった。思えばあれから半世紀。

昭和二十年八月十八日、大泊港で母と弟の姿を見つけ、一緒にこの船に乗って父母の故郷の函館に帰ろうと思ったが、組織の中での、まして兵隊として脱走することは考えられないことであった。

しかし、これが運命の分かれ道となり、後日、

私がシベリアへ捕虜となる身とは考えてもみないことであった。運命の分かれ道は次のことでも引き起こされた。母と弟を乗せた船は無事稚内に到着したが、次の日に大泊港を出港した泰東丸は、ソ連潜水艦の攻撃を受け留萌沖で沈没させられることになるのである。

平成二年七月、四十五年ぶりで第二の故郷、遠淵村を訪問した。ソ連名を「ムラボエボ」と呼ばれていた。浜のハマナスと湖の流れは昔と変わらずにいたが、昔の街並みは跡形もなく消え去り、文明の世から見放された様相を呈していた。昔のまま日本の領土であったら、ここは観光レジャー基地としてもっと発展したことだろうと感慨を新たにした。その昔住んでいた白系ロシア人の部落も跡形もなく消え失せていた。

村に残っていた人の話では、ソ連兵が進駐してから行方不明となってしまうたことであった。帝政ロシア時代の白系ロシア人は、日露戦争後ここに住みつき、日本人と一緒に生活していた

ため、赤軍とは相入れない運命の人々のようであつた。

清澄な空気を吸い、遙かな地平線をあかずながめていた。大正の御代に生まれ、昭和の御代の激動に耐え必死に働き、戦争、捕虜という地獄を見た老兵達が集まり語ることは、兵役と捕虜の話に尽きた。函館と北海道、内地の各地に樺太時代の友がいる。友の連れ合いが一人二人と欠けて行く。それは残された友として悲しいものだ。妻を亡くした友や友の連れ合いの本当の悲しさや淋しさを、夫婦健在の者はいまだわからない。明日は我が身と思つても、本当の孤独は体験した者しかわからない。

これから幾年生きられるか、誰もわからない。それまでの命を大切にしよう。

親を失い親のありがたさを知り、夫や妻を失い、家庭にとつての連れ合いがどんなに大切なものだったかを思い知り、友を失って友の懐かしさを思う。星空は満席、我々の席は空いていない。

だが、いつ空席ができて迎えに来るかもしれない。

ふと、父母の姿を思い浮かべた、母は昭和三十年九月十日、不慮の事故により六十五歳でこの世を去った。今、私は母の年を超えてしまった。昭和の初め樺太に移住し、貧乏に耐えながら八人の子供を養育し、引揚げの辛苦をなめたことは私の心に焼き付いている。葬送の日、母の棺に縋り泣いた。それから九年後、父は孤独の生活をしながら、姉と兄の世話を受けながら一年間、闘病生活を続けた。昭和四十五年十二月二十一日、大空の星が一つ二つ消え始めた早朝の出来事だった。八人の子供に見送られながら、七十八歳を一期として母のもとへ旅立っていった。

今、八人の兄弟姉妹が健在でいられるのは、父母のご加護だと思つている。